

『オデュッセイア』における自然と人間

[1] 古代ギリシア人にとって、「人間である」とはどういうこととして自覚されていたのであろうか。彼らは自然をどのように捉えていたのであろうか。古代ギリシア人の人間観、自然観、あるいは世界観と一口に言っても、実は複雑・多彩な展開がなされていて、例えば紀元前 8 世紀のホメロスの叙事詩と紀元前 4 世紀のプラトンの哲学では、同日には論じられない。ホメロスの英雄叙事詩は、いわゆる「暗黒時代」を通過して誕生したポリス社会の最初の文芸的所産として、当時の支配層であった貴族社会のエートスを色濃く反映しているものであったのに対して、プラトンは紀元前 5 世紀のアテナイの民主政治崩壊の申し子であった、という歴史的・社会的背景の差異を見ただけでも、そのことは容易に納得できることであろう。一例をあげれば、通常「魂」と訳される「プシューケー」(psyche)とは、ホメロスでは、人の死に際して息のごとくに肉体から飛び立って行き、その後は冥府において影のように漂う生命なきはかないなものかと考えられていた。しかしプラトンにとっては、それはロゴス(言論・理性)によって思惟することをその本質とし、肉体の牢獄から解放されたとき、感覚の迷妄状態からも脱却して、それ自体に立ち返る神的なるものであったのである。それ故、本稿では対象を主にホメロスの叙事詩『オデュッセイア』に絞って、ギリシア文学の最初期に、「自然と人間」あるいは「自然と文化」がどのように捉えられていたかを考えてみることにしたい。

[2] 『オデュッセイア』は『イリアス』とともに一般に紀元前 8 世紀の詩人と目されているホメロスに帰されている古代ギリシアの英雄叙事詩である。後者は 10 年にわたるトロイア戦争の終りに近い数十日を、ギリシア遠征軍の一の勇士アキレウスの「怒り」を中心テーマにして描いており、前者はトロイア陥落後の英雄オデュッセウスの「漂流・帰郷・復讐」を歌っている。オデュッセウスの漂泊は 10 年にも及んでいるが、約 12、000 余行に及ぶ『オデュッセイア』(「オデュッセウスの歌」の意)は、その 10 年間に年代紀風に順を追って物語るのではなく、『イリアス』(「イリオスの歌」の意。「イリオス」はトロイアの別名)と同様、その最後の日々焦点を絞った複雑にして劇的な構成を誇っている。ここでまず『オデュッセイア』全 24 巻の梗概を簡単に見ておこう。第 1 巻冒頭で詩人はムーサ(詩の女神、ミューズ)に、「あの男(オデュッセウス)のことを語り給え」と祈願し、短く主題を呈示した後、いきなり放浪 10 年目に開かれたオリュポスの神々の会議の様相から歌い始める。オデュッセウスは海神ポセイドンの怒りに触れて、ニンフ・カリュプソの住む絶海の孤島にすでに 7 年間も閉じ込められていたのであるが、ポセイドンの留守の間に開かれた神々の会議で、女神アテネの提案により、オデュッセウスの帰還が決議されたのである。一方、故郷イタケ島では、夫の帰りを待つペネロペイアが悪辣非道な求婚者たちに再婚を迫られ、オデュッセウスの財産は彼らの荒すままになっている。第 1 巻はオリュポスの会議の後、このイタケの現況に目を転じて、その後 4 巻の

終りまでは、オデュッセウスの息子テレマコスの物語が展開されるのである。彼は女神アテネに励まされて、イタケ人の会合で求婚者たちを弾劾するが、逆に彼らに嘲けられ、その会合は解散されてしまう。その後テレマコスは父の消息を求めて、オデュッセウスの戦友たちを訪ねて、老ネストルの国ピュロスへと旅立ち、さらにトロイア戦争の原因となった美女ヘレネの夫メネラオスの国スパルタへと向うのである。この「テレマコス物語」における詩人の意図は、後に父親に協力して求婚者たちの仇討ちをするまでに至る、若者テレマコス的人間的成長の、春の雪どけを思わせるような<sup>こつぜん</sup>忽然とした開花の過程を追うこととともに、故郷イタケの無法状態と、ピュロスとスパルタのそれぞれ立派な王に治められたテレマコスを客として厚くもてなすところに端的に現われているあるべき社会秩序を、対照的に浮き彫りにすることにあった、と思われる。以上がこの叙事詩の第1部である。

[3] 第2部は第5巻～13巻であるが、ここでいよいよオデュッセウスの登場を迎える。オデュッセウスを故郷に帰そうとの神々の決議がヘルメス神によって伝えられて、主人公はカリュプソの島から解放される。ところが彼はいかだで海上に出て18日目に、彼を憎むポセイドンに見付かり、大嵐に巻き込まれて難破させられるのである。オデュッセウスは生命からがらファイエクス人の島に漂着する。第6巻はオデュッセウスとファイエクス人の王女ナウシカとの出会いで有名な巻である。オデュッセウスは、ちょうど腰元たちと一緒に河口に洗濯に来たこの王女に救われる。そしてナウシカの父アルキノオス王の宮殿で歓待を受けた(第7～8巻)後、オデュッセウスは王の求めに応じて、トロイア戦争終結以後の彼の10年間にわたる放浪と冒険の物語を一人称で語るのである(第9～12巻)。彼が放浪した世界は食人種や巨人や魔女やニンフらの住む、まさに空想的な民話の舞台であった。第11巻では彼は生きながらに冥界にまで降ったことが語られている。この長い物語を語り終えると、オデュッセウスはいよいよファイエクス人の船で故郷イタケに送り届けられる(第13巻)。第3部は第14巻～24巻までで、スパルタから帰ったテレマコスとの親子の対面、そして復讐の計画の後、『オデュッセイア』は第22巻の求婚者殺害でクライマックスに達し、妻ペネロペイアとの再会、求婚者たちの血縁の者たちとの和解で大団円を迎えるのである。

[4] さて、以下において、オデュッセウスが漂着してファイエクス人に歓待される場面(第6巻～7巻)と、そのファイエクス人の前でオデュッセウスが語る数々の漂泊談の中から、キュクロプスの島での冒険の場面(第9巻)を特に取りあげて、先に掲げたテーマを検証してみよう。なぜこの2場面を取りあげるのか、それが必ずしも恣意的な選択によるものではないことを示す根拠は、論述の展開の中で明らかになるであろう。まず後者から検討してみることにする。オデュッセウス一行はロトパゴイ人(運<sup>はすくい</sup>食人)の国を逃れてキュクロプス人たちの国へとやってくるが、その国の様子が次のように描写されている。

そこからつらい思いを胸にさらに船旅をつづけ、増上慢で無法なキュクロプスらの地に着きました。彼らは不死なる神々まかせで、手を使って植えも耕しもしませんが、なんでも種も蒔かず耕作もしないのに生えてくるのです、小麦に大麦、そしてぶどうの樹、これは立派な房をつけてぶどう酒となるものですが、ゼウスの雨が彼らのために育ててくれるのです。彼らは協議をす<sup>アゴラ</sup>集会も掟も持たず、高い山の頂きにある<sup>ほらあな</sup>洞穴に住んで、各自で子供や妻を仕置きして、お互いに無関心に生きています。(第9巻 105~115)

キュクロプスたちは農耕をしないが、この土地では自然の実りが与えられているのである。英語の culture はラテン語の colo(耕す)に由来しているが、農耕(agri-culture、つまり、野の culture)がないとは、キュクロプスらが端的に文化とは無関係に生きている、ということなのである。さらにつづく 116 行以下では、キュクロプスの地に近い島のことが描かれているが、そこでは無数の野山羊が棲息している、と言われている。この点は、後にオデュッセウスが対決することになるキュクロプス族の一人ポリュフェモスが明らかに羊飼いと描かれていることと、どうつながるのか、必ずしも明確ではないが、少なくともこの文脈では、労苦を伴う人間の営みとしての牧畜もない点が強調されているのである。上の引用の後半では彼らには社会生活がないことが指摘されている。つまり各人が洞穴に妻子と共に住んでいるが、自然のつながりという枠組を越えて互いに社会的関係を持つことはしていないのである。そしてそのことをオデュッセウスはいかにもポリリス(都市国家)的人間たるギリシア人にふさわしく、キュクロプス人たちはアゴラも持たず、法律も知らない、と言うのである。さらに 125 行以下では、これもまた海の民たるギリシア人オデュッセウスらしい観察であるが、キュクロプス人らは船を持たないこと、そして船を作る技術がないこと、そこから、海を渡って交易あるいは交流を行なうという経験のないことが述べられている。つまり、いずれの点もキュクロプスらの暮しぶりを、文化のネガティブとしての野生、自然のままの生として捉えている、と見ることができよう。

[5] それではそのような自然児たるキュクロプスとはどのような<sup>やから</sup>族であったのだろうか。すでに上の引用文の冒頭で、彼らが増上慢で<sup>なみ</sup>掟を蔑する者たちと言われていたが、この点はオデュッセウスが彼らの一人ポリュフェモスと対決する過程で具体的に示されてゆくのである。オデュッセウスはこれもまたいかにもオデュッセウスらしい、あるいは一般にギリシア人の特質と言える強い好奇心に促されて、キュクロプスの地を探検する決意を下す。「あの人間らがどんな者たちが調べてみよう、乱暴な、野蛮で不正な者が、それともよそ人を親切にもてなし、神を<sup>おそ</sup>畏れる心を持つ人たちが」(174~176)と。オデュッセウスはここで無法、野蛮、不正と対比させて、敬神とともに客人の歓迎(philoxenia)をあげていることに留意したい。(フィロクセニアのフィロは「愛すること」、クセニアは元来、「主客友好の関係」を意味するギリシア語であり、クセニアという語に含まれているクセノスは、主人に対する客人とともに、客人に

対する主人をも指す語であった。) 漂泊の人オデュッセウスにとっては、フィロクセニアは当然のことながら最も深い関心事なのであった。オデュッセウスの場合に限らず、フィロクセニアの徳は旅することが現代とは比較にならぬ程困難で危険であった古代社会において最も基本的な掟の一つであった、と言えよう。事実、ギリシアのオリュポスの最高神ゼウスは、しばしば、「クセニオス」という枕ことばを付けて、「ゼウス・クセニオス」と呼ばれるが、これは「客人を保護するゼウス」、より厳密には「主客友好の掟を立てるゼウス」の意味である。このゼウスの掟の重要さは、ギリシア英雄伝説圏の中核的な位置を占め、彼らの豊かな文芸に無数の素材を提供してきたトロイア戦争そのものが、まさにこのゼウスの掟に対する違反 つまり、スパルタ王メネラオスの客であったトロイアの王子パリスが、メネラオスの妻ヘレネを奪って逃げたこと によって引き起こされたという一事からも十分にうかがわれるであろう。そして『オデュッセイア』も全篇この掟を軸にして展開していると称して過言ではない。オデュッセウスの故郷イタケでペネロペイアに多数の求婚者が言い寄り、オデュッセウスの館に客として逗留して彼の財産を蕩尽している無法な振舞は、まさにこのゼウスの掟を蔑する行為であり、オデュッセウスの復讐はゼウスの正義の回復に他ならなかったのである。

[6] さて、オデュッセウスたちはとある巨人のものらしい洞窟に到着して中を見分している間に、この洞窟の主のひとつ目巨人ポリュフェモスに閉じ込められてしまう。これも巨人を一目見たいというオデュッセウスの好奇心がなせる業であった。そこでオデュッセウスは自分らがトロイアからの帰途、放浪を余儀なくされているギリシア人であると告げ、「どうか神々を敬って欲しい。われらはあなたの嘆願者だ。ゼウスは嘆願者と旅<sup>クセノス</sup>人のための報復者であり、恥を知る心を持つ旅人を守り給うクセニオスなる神なのだ」(269 - 271) と膝にすがって言う。しかし巨人はこの嘆願を情容赦もなく拒否し、かえってオデュッセウスの仲間のうちの二人をいきなり地面に叩きつけ、臓腑も肉も骨の髄までも、「山で育ったライオンのように」(293) そのまま喰ってしまう。生肉を喰う これは火を用いて料理したものを食べるのが文化の業であるのに対して、まさに野生の自然の営みを表象したものなのである。翌朝もこの巨人は同じ残酷な業を繰り返して洞穴から羊どもを追って出て行く。そこで巧知にたけたオデュッセウスは一計を企んだのである。夕方になってポリュフェモスが帰ってきてまた二人を取って食べると、オデュッセウスは携えていた酒を勤める。その甘い酒にやがて巨人が酔いつぶれたとき、昼間のうちに大きなオリーブの木の先を尖らせて用意しておいた棒杭を熱灰で焼き上げ、巨人のひとつ目に突込んだのである。その有様を浮き彫りにするホメロス独特の<sup>シミリ</sup>比喩 ( simile ) を以下に引用しておこう。

それに私も上からのしかかってねじり廻した。ちょうど誰かが船材に大錐<sup>きり</sup>で穴をあけると、他の者らが下で両側から<sup>ひも</sup>紐を取ってぐるぐる廻すと、錐が

どんだんめり込んで行くように。(384～386)……鍛冶屋が大斧や手斧を冷たい水につけると大きな音を発する、そしてそれが鉄の力となる。ちょうどそのように、彼の目はオリーブの棒のまわりでじゅっと音を立てた。(391～394)

ここでオデュッセウスの行為が、船大工や鍛冶屋の技術に譬えられているのである。つまり、自然に対する文化の輝かしい営みである。しかしここにはその文化の問題性も同時に暗示されているのではなからうか。ポリュフェモスに具現している野生は獐猛そのものである。しかしそれに対抗する文化人たるオデュッセウスの振舞も、それ自体暴力を内に孕んでいる、いな、暴力そのものとして表象されているのである。そしてオデュッセウスの行為は、たとい倒錯した形においてであれ、客人の立場にある者が主人に対して危害を加えたということなのであった。さらにオデュッセウスの脱出計画には、偽りの要素が必須条件として含まれていた。酒を振舞われて上機嫌になったポリュフェモスに名前を尋ねられたとき、オデュッセウスは自分は“ウーティス”だと答える。“ウーティス”とは“誰も……ない”(no body)の意であり、そのためにこの計略が今また効を奏することになる。目を突かれて喚き立てるポリュフェモスに、他のキュクロプスたちがやって来て外から事情を尋ねると、彼は「仲間たちよ、ウーティスが俺を欺して暴力で殺そうとしているのだ」(408)、つまり「誰も殺そうとする者はいない」と答えるはめになったのである。このことについてオデュッセウスは次のように述懐している。

私の心は高らかに笑ったことでした。私の考えついた名前とすばらしい知謀がうまうまと欺しおおせたことを。(413～414)

このように、危険を見事に凌駕したオデュッセウスの知恵とそれに基づく行為は、暴力のみならず欺瞞をも内包するものなのであった。だからと言って、『オデュッセイア』において文化に内在する問題性が深刻なものとして受けとられているということをあまりに強調するのは問題であろう。紀元前5世紀のギリシア悲劇になると、例えばソフォクレスの『アンティゴネ』において、自然に対する文化(ここでは政治)のヒュプリス(高ぶり)は、この悲劇を構造的に規定するものとして捉えられるに至る。しかし『オデュッセイア』において、主人公は彼の知恵がいかに危機に打ち勝ったか、その手柄話をここで語っているのである。とはいえ、自然と文化の関わりの中で、文化が単純に正の価値だけを付与されているのではなく、少なくともアンビヴァレントな性格を持つものとして見られている、と見てよいであろう。それはこの物語の帰結にも示唆されているのである。オデュッセウスはキュクロプスらをうまく出し抜いて洞穴を脱出し、あまつさえ多数の羊を奪って無事に船に帰ったとき、高慢にもキュクロプスを罵倒し、得意満面、目をつぶしたのはオデュッセウスだと名のる。そのため、ポリュフェモスの父である海神ポセイドンの怒りに触れ、その後彼は仲間も船も失い、長い漂泊の年月を送ることを余儀なくされたのである。

[7] ここでファイエケス人の世界 キュクロプスの地での冒険を含む数々の漂泊談をオデュッセウスが物語っている舞台 に目を転じることにしよう。すでに言及したように、オデュッセウスは 7 年もの間カリュプソの島に幽閉された後、神々の計らいで解放される。しかし、海上で再び嵐に遭遇し生命からがら泳ぎ着いたのが、このファイエケス人の島であった。そして彼はこの島の王アルキノオスに歓待された上で、ついに故郷イタケに送り届けられることになる。それ故、オデュッセウスにとってこの島での経験は、彼の一連の数奇な遍歴の最後の一齣<sup>こま</sup>でもあったのである。まさにそのこと、つまり、おとぎばなしの一部でもあり、それを語る場でもあるという二重性と呼応して、ファイエケス人の国は魔女やニンフや巨人や怪物の住むメルヘンの世界とイタケの現実的・日常的世界、あるいは神の生と人間の世との橋渡し的な様相を呈しているのである。これを象徴するのが、この島に漂着したオデュッセウスが疲れ果ててその下に眠りつづけるオリーブの木立である。河の近くに生えていたそのオリーブの樹の二つの繁みは、同じ所から生えていて、一つは野生のオリーブ、他は栽培されたオリーブであった、と言われているのである（第 5 巻 476～477）。

[8] さて第 6 巻はオデュッセウスとファイエケス人の王女ナウシカの牧歌的な出会いの場である。王女は女神アテネの計らいで侍女たちを連れて河口に洗濯に行き、海の渚に洗濯物を拡げて乾くのを待つ間、皆でまり投げに打ち興じる。その時のナウシカと少女たちの楽しげな様子を表象する<sup>シミリ</sup>比喩をここに引用しておこう。

侍女たちも王女自身も食事を楽しくすませると、ヴェールを脱ぎすててまり遊びをした。彼女らの中で白い腕<sup>かいな</sup>のナウシカが歌の指揮を取ったが、その様は、ちょうど矢を射るアルテミスが高くそびえるタクゲトスか、エリュマントスの山の峯々を進むよう、猪<sup>いのしし</sup>や足の速い鹿狩りに打ち興じながら。女神とともに神<sup>アイギス</sup>楯を持つゼウスの娘なる野に住むニンフたちが戯れ、母神レトも心に喜ぶ。アルテミスはニンフたちすべてより頭と額だけ背が高く、皆美しい中にたやすく見分けられる。そのようにまだ嫁がぬ乙女は侍女たちの中で抜きんでて見えた。（第 6 巻 99～109）

この乙女たちの喚声に、オリーブの木立の下にくっすり眠り込んでいたオデュッセウスは目を覚まし、葉の繁った枝を肌に当てただけの姿で少女たちの前に現れるのである。それに恐れをなして侍女たちは逃げ散るが、ナウシカだけは毅然として踏みとどまる。（女神アテネがその胸に大胆さを吹き込み、恐れを手脚から取り去られたので、と詩人は語っている。）そこでオデュッセウスは彼女にきわめて鄭重な態度で嘆願し、憐みを乞う。その冒頭でナウシカに次のように呼びかける。「お膝にすがってお願いします、姫君よ。あなたは女神でおいでか、それとも死すべき人の子なのか。もし広大な天に住む神々の御一人なら、そのお姿といい、お身の丈といい、大いなるゼウスの娘御アルテミスにいちばんよく似ておられる、と存じます。……」（149～152）ここでも上に引用した比喩と同じように、ナウシカがアルテミス女神に譬えられている

のである。さらにオデュッセウスは、かつてアポロンの聖地デロス島の祭壇のかたわらで目にしたというなつめやしの若木に譬えて彼女を讃め称えるのである。

[9] 本筋からは外れるが、オリュンポスの神々を輝やかしい、しかも距離を感じさせる深い精神性の側面において代表するのがアポロンであろう。この永遠の青年たる男性神の特質に最も近いものを具現した女性神といえ、やはりアポロンの双生の妹アルテミスであろう。女神レトがデロス島で生んだこの双生の兄妹神を、ホメロスとともに弓矢を持つ神として表象し、「遠矢を射る」という枕詞を冠して呼ぶことが多い。つまり、アポロンとアルテミスがともに「距離」と本質的に結びついていることを、この形容句は示している、と言えよう。その弓矢はもちろん人間に死をもたらす武具である。アポロンのもう一つの聖地デルフォイの神殿には、神託を求めてここを訪う人々に呼びかけて、「汝自らを知れ」という警句が掲げられていた、と伝えられているが、そのころは、「人間よ、神のごとくあることを求めるな、汝は死すべき者であることを記憶せよ」ということであった。人間にその限界を知らしめること、ひいては、その限界における自由を指示することこそ、アポロンの「距離」の本質であった、と言えよう。弓はその形態から、また矢を放つとき音を発するところからも、堅琴に通じている。アポロンは堅琴を奏する姿で描かれることが多いが、彼は音楽を司る神でもあったのである。音楽こそこの神が具現している深い精神性、あるいは限界における自由を端的に表現しているものではなからうか。アルテミスの場合には、距離は精神性というよりは、先の比喻に的確に表現されていたように、<sup>けが</sup>穢れなき野生の戯れ、<sup>くびき</sup>軛からの自由を指示していよう。これを人間世界の類比で表現すれば、結婚の軛を知らない乙女の純潔と自由である。(ところで、アポロンの知的性 = 精神性に対して女性的知性を具象化すれば、これも結婚しないもう一人の女神アテネとなる。相違はアポロンが遠くはるかに行く神であるのとは反対に、アテネが近くに在る神であるところに現れている。つまり彼女は女神でありながら軍神であり、またアテナイに代表される都市ないしは国家の守護神であり、さらに特に当時の女性の典型的な手仕事であった<sup>はた</sup>機織りの技術を司る神であったように、この女神の知性はプラクティカルに働くところに、その特徴が見られるのである。先のポリュフェモスの洞穴からの脱出に際して端的に発揮されたわが主人公オデュッセウスの<sup>メーティス</sup>知恵こそ、アテネの贈物に他ならないのである。彼に付添い、危機に際して手を差し伸べるのはいつも女神アテネなのである。) いずれにせよ(アポロンの精神性とはやや異なるにせよ) アルテミスの世界に漂っている純潔は、軽々には人を寄せつけないある知的なアテネの知性とは別種の、しかしやはり知的といってよい気品を、その意味で距離を感じさせるものがある、と言えよう。オデュッセウスが親愛の情を示しつつも、礼節を弁えた態度でナウシカに接したのも、この少女のアルテミスの特質のしからしめるところであった。

[10] さて、本筋に帰ろう。オデュッセウスの嘆願に対してノウシカは次のように答えている。

よそのお方、あなたは悪い人でも愚かな人でもないとお見受けいたします。仕合せはオリュンポスのゼウス御自らが人間に、善い人であれ悪い人であれ、お心のままに、それぞれにお分けになります。あなたの今の御事情もおそらくゼウスのお与えになったもの、ともかくも耐えてゆかれる他はございません。けれども、今私どもの町と地にお出になったからには、着物もその他どんなものでも不自由をおかけすることはございません、試練にあった嘆願者が出会った人から当然求めてよいほどのものなら……（187～193）

ここまで二人の出会いを辿ってきて、先に検討したポリュフェモスの洞穴の場面とこの場面の対比される意味が、改めて説明の必要もない程に明瞭になった、と思われる。オデュッセウスが異国の旅人として、嘆願者として置かれている立場は両方に等しいのである。しかし一方はフィロクセニアの掟を無視し、暴力をもって彼を遇したのに対して、他方はこれと全く対照的に、文化の粋とも称すべき洗練された礼節をもって見知らぬ流浪の旅人をもてなすのである。その際、ノウシカは侍女たちに向けて「異国の人も物乞いをする人もすべてゼウスがお遣しの人たちなのです……」（207～208）と注意を促しているが、ここにくだんのゼウス・クセニオスの掟に心から信託している人間のあるべき理想の姿が表現されているのである。そしてこの姿は、ポリュフェモス、つまり文化のネガティブとしての野蛮に対するものであるにとどまらず、実はオデュッセウスがこれから帰って行こうとする故郷イタケというなまなましい現実の人間世界のありようをも、対照的に浮き彫りにするものであった。すでに言及したように、そこにはまさにゼウスの掟を蔑し、人間社会のあるべき秩序を破壊する無法がはびこっていたからである。この意味においても、ファイエケス人の世界はメルヘンの世界と現実の世界の両方に開かれた位置を占めていたのである。しかしなんといいてもノウシカはニンフでも女怪でもなく飽くまでも人間であり、気品と威厳をそなえた理想の王女像であった。それからオデュッセウスは王宮に赴くことになる。その道すがら「オデュッセウスは港や釣合いのとれた船や殿方たちの集会場や高く杭のついた長い壁に感嘆した、見るも驚くべき光景であった」（第7巻43～45）と述べられている。ここにも彼がキュクロプスの島で観察したのとは全く対照的な人間文化の感嘆すべき景観が繰り広げられているのである。さらに彼は王宮に迎えられて王と王妃からもこの上ない厚遇を受けることになる。その限りにおいてこの島の有様は野蛮とは対照的な、人間の、つまり、文化のあるべき姿として描かれている、と称してよいであろう。ところが、よく観察してみると、このファイエケス人の国は、ただの人間の世界ではないことが次第に判明してくるのである。

[11] まず、オデュッセウスの案内役をつとめる水がめを運ぶ乙女（実は人間に紛した女神アテネ）によって、アルキノオス王とアレテ王妃が伯父と姪の関係にあることが紹介される（54以下）。このような近親婚はファイエケス族が神々に近い存在であることを示唆していると言え

よう。周知の通りオリュンポスの最高神ゼウスとその正妻ヘラは姉弟の間柄でもあったのである。そして神々の世界のこの習わしはかえって動物の世界のそれとつながるものなのである。さらにオデュッセウスが王宮に到着すると、そのたたずまいが描写されるが、それは太陽か月かと思えるまでに金、銀、青銅、そしてエナメルづくしであり（84 以下）、非現実的・メルヘン的な趣きが強<sup>アウレ</sup>い。また内庭の外には広い果樹園があつて、そこには梨やざくろ、りんごやいちじく、そしてオリーブなどが見事に勢いよく生い繁っているが、それらの果実は夏も冬も一年中決して絶えることがなかった（112 以下）と語られるのである。これはいわば黄金時代の再現であろう。つまり、ファイエクス人の島のこの有様は、現実の世界というよりは、いわば「桃源郷」であり、すでに論及した通り、まさにオデュッセウスが遍歴したメルヘンの世界の一齣に他ならなかったのである。

[12] さて、オデュッセウスは王と王妃によってその嘆願を聞き入れられて宴に与ることになる。そのとき、アルキノオス王は、この客人を十分にもてなし、神々にも贅<sup>にえ</sup>を捧げた上で、彼の故郷に無事に送り届けようと提案し、次のように続けるのである。

……またこの方が故郷の土を踏むまえに、途中でなにか禍いや苦難に遭遇しないようにしなければならない。だがそれから、母御がこの方をお生みのそのときに運命と厳しい糸紡ぎの女神たちが糸で紡いだ分をこの方は受けることになる。だがもし誰か不死の神々の御一人が今天から降り給うているのなら、今度は神々が何かいつもとは別のことを図っておられるのだ。これまでは立派な百牛の贅を捧げるときに、神々は常にわれわれにはっきりとした姿で現れ給い、われわれと同じ席に坐って宴を共にし給うたのだから。また誰か道行く人が一人で歩いていてお出会いしても、神々は決してお姿をお隠しになることはない、われわれはキュクロプスたちや野蛮な巨人族<sup>ギガンテス</sup>と同様に神々に近いのだから。（195～206）

アルキノオスはここで（特に、その後半部で）彼らファイエクス族が普通の人間たちとは違って神々と特別の関係におると明言している。とりわけ留意したいのは、その点で彼らはキュクロプスたちや巨人族と等しい（206）と述べている点である。実は、この小論において『オデュッセイア』の数々のエピソードの中から、ポリュフェモスの国での冒険とこのファイエクス人の島での経験という一見恣意的に見える二場面を選び出して、並べて検討を試みてきたテキスト上の客観的な根拠は、この 206 という一詩行にあったのである。あの野生の自然、野蛮そのものの具現とも言うべきキュクロプス族と黄金時代の再現とも称すべき楽園生活を営むファイエクス族が、ともに神々に近い存在だということ。これは両者がつまるところ同じ根源に帰一するという、換言すれば、両者はその同一のものの別の現れであるということを示唆しているのではなからうか。比喩的に言えば、それは夜と昼の関係に似ていよう。そして夜と昼が自然の交替のリズムを刻むように、キュクロプス族とファイエクス族は自然という根源的存在の、互いに対照関係を成す二つの現れである、と言ってよいであろう。ギリシアにおいては、

万物を創造した聖書宗教の神とは違って、あらゆる神的なるものは キュクロプス族もファイエクス人も、そしてあのオリュンポスの神々も 結局は自然という根源的秩序の様々な現象であったのである。自然は自らを多様な形で現わす。それ故、神的なるものも多様に思い描かれたのである。それが人間にやさしく微笑みかけるとき、あのきわめて人間的な、光輝くオリュンポスの神々や、ファイエクス人の「桃源郷」として描かれ、それが恐ろしい、人間にとって不可解なものとして立ち現れるとき、運命や死や夜の女神たちのごとき、あるいは怪奇なポリュフェモスのごとき否定の力として想像された、と言えようか。

[13] それではオデュッセウスはアルキノオスの言葉 オデュッセウスがいつもとは違う姿で天から降り給うた神々の一人かも知れない、という言葉 に対して、どのように答えたのであろうか。

アルキノオス、決してそのようにお考えにはならないで下さい。私は広大な天に住み給う不死なる神々とは姿においても身の丈でも似ても似つかぬ者、御覧の通りの死すべき人間なのですから。あなた方が御存じの誰であれいちばん苦勞を担っている、その人たちに劣らず苦難を受けた身と申せましょう。いや、神々の御意志で私が蒙った禍いをことごとく語るとすれば、なお一層長い話となりましょう。……夜が明け次第、この不幸な私が、たとえ<sup>あまた</sup>数多の苦しみを経ることになろうとも、祖国の土を踏めますように、急ぎ取りはからって下さい。私の財産、召使いや高い屋根を持った大きな屋敷を見たらえでなら生命を奪われようといひのです。(208~214 中略 222~225)

ホメロスにおいて、神々は不老不死であり、しばしば「安楽な生を送り給う」という枕ことばを付して呼ばれている。ここでオデュッセウスはその神々との対比において、自分が死すべき人間であるとの明確な自覚を表明しているのである。しかも彼は他の誰よりも苦難を背負ってきたという事実に、まさに彼が彼であるという誇らかなアイデンティティを見出しているかのごとくである。そして故郷に帰れるなら、どんな苦勞も、死ぬことさえ辞さない、と宣言しているのである。ポリュフェモスの洞穴から脱出して故郷に帰りたいということなら誰でも納得できることであろう。しかし彼がこの希望を表明しているのはこの世の樂園においてなのである。しばらく後に、その人柄を見込まれたオデュッセウスは、アルキノオス王から、ナウシカの<sup>むこ</sup>婿となってここに留まってもらいたい、財産も家も差し上げよう、との申し出を受ける(311以下)。それでもオデュッセウスの決意は変らなかったのである。しかも彼が神々に近い安楽な生活を拒否して、苦勞を厭わず死さえ覚悟して帰ろうとする故郷とは、すでに反復して言及したように、無秩序と混乱が支配する、理想の社会からほど遠い、あまりにも人間的な現実であった。

[14] しかしこれこそ叙事詩『オデュッセイア』全篇を貫くモチーフなのである。ファイエクス人の鳥のエピソードからは外れるが、このモチーフが最も明確に、しかもうるわしく示

されている個所を一瞥しておこう。それは第 5 巻のカリュプソの島でのことである。オデュッセウスはこの島に 7 年間も幽閉されていた。しかしその間に彼は決して虐待されていたわけではなかった。むしろ安楽な生を享受し、しかもニンフのカリュプソから不死の身となり夫として留って欲しいと乞われていたのである。しかしオデュッセウスはこのカリュプソの申し出を断わり、いつも浜辺に坐っては涙にくれ、荒涼とした海の彼方の故郷への憧憬に胸を焦していたのである。そんなオデュッセウスにもついにかの神々の決定がヘルメス、そしてカリュプソを通じて伝えられる。その直後のことであるが、故郷に帰りつくまでどんな労苦をなめねばならないかを知っていたら、たとえ毎日妻に恋いこがれていても、ここに留って不老不死の寿命を得ることを望む筈だ、姿形でも私は彼女に劣ってはいない、と言うカリュプソに対して、オデュッセウスは次のように答えている。

女神よ、どうかこのことでお腹立ちになりませぬよう。自分でもよく承知しております、思慮深いペネロペイアといえど、あなたに引き比べれば背丈も容貌も劣ることを。妻は人の子、あなたは不老不死でいられます故。それでも私はこれまでいつも、帰郷の日を迎え家に戻れるのを待ち望んできたのです。たとえばどう酒色の海原で、いずれかの神に難破させられようとも、艱難に耐える心をもって、じっと我慢してゆきましょう。すでにこれまで波の上でも戦場でも数多の苦難に遭遇し、労苦を重ねてきた私のこと、さらに難儀が付け加えられたとてなにほどのこともありますまい。(5 巻 215 ~ 224)

妻ペネロペイアが不老不死の女神に姿形でどれほど劣っていようと、またどれほどの苦難がこの先待ち構えていようと、故郷で自分を待つ妻のもとに帰りたい、死すべき人間でありつづけたい、こう言い切るところに、オデュッセウスの心意気が見られる。ギリシア文化の根底にあるヒューマンイズムの かのデルフォイのアポロンの警句「汝自らを知れ」のここに通じる 精神の原型がここにかがえるのである。それはまた他方で、野性の自然 人間の外にも内にも存在する獣的本性 との対比において、人間であることを自覚し、それを戦い取ってゆこうとする精神でもあった。すでに述べたように、獣性と神性という両極端に位置するものは、ギリシアにおいて、根源的自然の現れとして一つにつながってゆき、人間であることはその自然との対比において浮き彫りにされてくるものであった。つまり、人間であることとは、上下両方向において人間を超えるものの中であって、絶えず人間となることに他ならなかったのである。文化とはその意味で自然を耕すこと、人間が人間となる最も根源的な営みを意味していたのである。

[15] オデュッセウスがそのように苦難を厭わず帰ることを切望した故郷は、不法な求婚者たちによってペネロペイアが日毎悩まされ、オデュッセウスの財産は浪費されつづけている有様であった。それ故、オデュッセウスが帰国するや血の雨が降らざるを得なかったのである。『オデュッセイア』が放浪、帰郷のみならず、復讐の叙事詩でもあるゆえんである。本稿ではこの

経緯については言及することを省略せざるをえない。しかし最後に本稿の主題とのつながりから、復讐、妻との再会というクライマックスの後、オデュッセウスが父ラエルテスを訪ねるくだりを見ておきたい。老ラエルテスはどういうわけか王宮には居ず、田舎で果樹園を営み、非常に質朴な暮らしをしていたのであった。二人の再会に先立つ場面は次のように描かれている。

そこで彼はよく手入れされたぶどう畑で父がただ一人で樹のまわりを掘り返しているのを見出した。父は見苦しく汚れたつぎだらけの肌着を着け、<sup>すね</sup>脛には牛の皮をつぎはぎした脛当てを引掻き傷を避けるために縛り、両手には茨<sup>いばら</sup>よけの籠手<sup>こて</sup>を巻き、頭には山羊の帽子を被っていた、悲しみを養いつつ。このように父親が老いにやつれ果て、大なる悲嘆を胸に抱いているのを見て、忍耐強く尊いオデュッセウスは高い梨の樹の下に立ちどまって涙を落した。  
(第24巻 226~234)

この果樹園はあのファイエクス人の島の夏も冬も問わず一年中豊かな実りをもたらす楽園とはそして植えも耕もしないのに、大麦・小麦・ぶどうなどの実りがもたらされるというキュクロプスの島とも 対照的な様相を呈している。オデュッセウスがアルキノオスの申し出を断わり、またカリュプソの約束した不老不死の悦楽に安住することを潔しとせず、帰ることをひたすら希求した故郷とは、実に茨の生える石ころだらけの痩せた土地に額に汗する労苦によって辛ろうじて見事なぶどう園が営まれる、そのような場所であった。また彼が愛してやまなかった人間とは、絶えず悲嘆があり、涙にも暮れる、しかしつぎだらけの肌着をまとい、茨よけの籠手<sup>こて</sup>を手に巻いて忍耐強く労働にいそしむ、それだけに労苦の実りをひとしお飲むことを知っている、そのような人間なのであった。ここにギリシア的な人間の自己理解の原初的な形が端的に刻み出されているのである。

1. ホメロスの英雄叙事詩とプラトンの哲学が異なる一例として、「プシューケー（魂）」理解の違いが挙げられているが、それは（ ）からである。
  - a. 詩人と哲学者の違いを強調したかった
  - b. 古代ギリシア人の人間観、自然観を、『オデュッセイア』にしぼって論じることの理由を示そうとした
  - c. 言葉はすべて歴史的・社会的に規定されていることを示そうとした
  - d. はかない影のような「魂」が、時代とともに神的なものへと昇華してゆくことを明らかにしようとした
  - e. ホメロスでは軽視されていた「魂」が、プラトンでは重視されるようになったことを示そうとした
  
2. イタケ島の現実は（ ）の現実とコントラストを成している。
  - a. キュクロプスの島
  - b. カリュプソの島
  - c. ピュロス
  - d. ファイエケス人の島
  - e. ギガンテスの国
  
3. 「文化」の概念の中に含まれていないものは、次の（ ）である。
  - a. 牧畜
  - b. アゴラ
  - c. 礼節
  - d. 不老不死
  - e. 敬神
  
4. 本資料でギリシア人の特質として言及されていないものは、次の（ ）である。
  - a. ポリス的たること
  - b. 海外との交流への関心
  - c. 好奇心
  - d. 技術への関心
  - e. 欺瞞に対する憎しみ

5. 本資料で、オデュッセウスがキュクロプスの目をつぶす行為に添えられた比喩は、自然と文化の関係における文化のアンビヴァレントな性格を示唆している、とあった。この「アンビヴァレント」な性格とは、文化の自然に対する（ ）を意味している。

- a. 高ぶり
- b. 勝利
- c. 欺瞞性
- d. 暴力性
- e. 両義性

6. 「限界における自由」と無関係のものは、次の（ ）である。

- a. 音楽
- b. 「汝自らを知れ」
- c. 「人間は死すべき存在である」
- d. アポロンの「距離」
- e. 危機に際して手を差しのべる神

7. ソクラテスの有名な「無知の知」ないしは「無知の自覚」というテーゼは、知識論あるいは認識論的に次の（ ）を解釈し直したものと考えられる。

- a. 「汝自らを知れ」
- b. 限界における自由
- c. オデュッセウスのメーティス
- d. 文化に内在する問題性
- e. アポロンの「距離」

8. 知恵の処女神アテネと最も関係のうすいものは、次の（ ）である。

- a. 実用的知識
- b. オデュッセウスのメーティス
- c. 軍事的戦略的知識
- d. 穢れなき乙女の知的気品
- e. 政治的知性

9. [14]に、「しかしこれこそ叙事詩『オデュッセイア』全篇を貫くモチーフなのである」とある。「これこそ」とは次の( )を指す。

- a. 人間の理想の追求
- b. 死すべき人間であることの自覚
- c. 人間世界の現実のありのままの肯定
- d. 労苦と死への希求
- e. 放浪・帰郷・復讐

10. 資料[14]に、「それはまた他方で、野生の自然との対比において、人間であることを自覚し、それを戦い取ってゆこうとする精神でもあった」と書かれている。冒頭の「それ」とは、次の( )を指す。

- a. オデュッセウスの心意気
- b. アポロンの警句「汝自らを知れ」
- c. フィロクセニア
- d. ヒューマニズムの精神
- e. 不死の神々との対比において、死すべき人間であることを肯定する精神

11. 本資料「『オデュッセイア』における自然と人間」に副題を付けるとすれば、次の( )がよい。

- a. ギリシア的ヒューマニズムの原型
- b. ギリシア文化の両義性
- c. ギリシア人の死生観
- d. メルヘン的世界と日常的世界
- e. ギリシアにおける理想と現実

以下の問題には、相互に関連する二つの文章(1)と(2)が与えられています。筆者の考え方に照らして最も適当と思うものを、次のa, b, c, dの中から一つ選びなさい。

- a. (1)、(2)とも正しい。
- b. (1)、(2)ともに間違っている。
- c. (1)は正しいが、(2)は間違っている。
- d. (1)は間違っているが、(2)は正しい。

12.

(1)ホメロスにおいて、プシューケーの立ち去った後の肉体は死体であった。つまり、肉体とはプシューケーの牢獄と考えられていた。

(2)プラトンにおいて、プシューケーとは、人の死に際して感覚の迷妄状態から解放されるとき、初めてロゴスに立ち帰る神的なるものであった。

13.

(1)オデュッセウスのキュクロプスの島での冒険も、ファイエケス人の島での経験も、トロイア陥落後10年目の最後の数日間の出来事である。

(2)テレマコスのスパルタ訪問は、オデュッセウスによるキュクロプスの島での冒険とほぼ同時に進行していた。

14. 「オデュッセイア」の数々のエピソードの中から、本資料が特にキュクロプス人の島での冒険とファイエケス人の島での経験を対比して取りあげている根拠は、

- (1)一方がゼウス・クセニオスの掟への無視、他方がそれへの信従を具現しているからである。
- (2)キュクロプス人もファイエケス人も、ともに神々に近い存在である、と語られているからである。

15. キュクロプス人たちが文化のネガティブであることは、彼らが

(1)農耕を営まず、したがって大地が与える神々の恵みとは無関係に生きている点に、端的に現れている。

(2)妻子とともに住むこと以上の一切の社会的関係を持たない、反社会的な自然児である点に、端的に現れている。

16.

(1)ゼウスは乞食と旅人を区別しないが、他方、正しい人には幸いを、悪い人には禍いをもたらす神であると考えられている。

(2)オデュッセウスのキュクロプスに対する振舞は、ゼウス・クセニオスの掟に基づく処罰の意味をもっていた。

17. 『オデュッセイア』の中心テーマ「漂流・帰郷・復讐」のうち、

- (1) 「漂流」、「帰郷」は、フィロクセニアの掟と関係するが、「復讐」は無関係である。
- (2) 「帰郷」、「復讐」は、フィロクセニアの掟と関係するが、「漂流」は無関係である。

18.

- (1) 「火を用いて料理すること」、これは文化の営みの象徴である。これは洋の東西に通じる普遍的な認識である。
- (2) 「生肉を喰う」、これは野生の営みの象徴である。ただし、この認識はギリシア・西洋世界のものであり、刺身を食する日本人には通用しない。

19.

- (1) 『オデュッセイア』において、技術は暴力や欺瞞なしには成立しない、と見られている。
- (2) 自然と文化の関係について、ギリシア悲劇はホメロスより一層深い認識に達している。

20. 本資料に、ソフォクレスの『アンティゴネ』において、「自然に対する文化のヒュプリスは、この悲劇を構造的に規定するものとして捉えられている」とあった。これは、自然に対する政治の高ぶりが、

- (1) それなしには、この悲劇が作品として成立しえない、モチーフとなっているとの意味である。
- (2) 紀元前 8 世紀とは違って、紀元前 5 世紀においては、悲劇の主題そのものとなるまでに、深刻化したことを示している。

21. ファイエケス人の島がメルヘン的世界と日常的世界の双方の橋渡しとなっていることは、この島が、

- (1) 神々の世界と人間の世界の双方に開かれていることを意味している。
- (2) 自然の世界と人間の世界の双方に開かれていることを意味している。

22. 資料に、ファイエケス人の国は、オデュッセウスのおとぎ話の一部でもあり、同時にそれを語る場でもあるという二重性を持っている、とあった。この二重性と呼応して、次のことが言える。

- (1) ナウシカは、理想の人間像であると同時に、ニンフ的存在でもある。
- (2) ナウシカのフィロクセニアは、ポリュフェモスの振舞をも、またイタケ島の現実をも、ともに対照的に浮彫りにする位置を占めている。

23. 資料に、オデュッセウスがその下で眠ったオリーブの二つの繁みは、同じ所から生えていて、一つは野生のオリーブ、他は栽培されたオリーブであった、とされているが、

- (1)野生のオリーブは、文化のネガティブとしての自然に内在するヒュプリス、暴力、つまり神々の祝福のなさを暗示している。
- (2)栽培されたオリーブとは、文化の象徴としての農耕の存在、つまり神々の祝福を暗示している。

24. ナウシカと侍女たちのまり遊びがアルテミスと野に住むニンフたちの戯れに譬えられる比喩において、「母神レトも心に喜ぶ」とあるのは、

- (1)比喩に対応する物語の部分で、はっきりとは語られていないものの、実際にはナウシカに母アレテが付き添って河口にまできていたことを暗示している。
- (2)この比喩の世界をレトの目が見ているごとく、ナウシカたちの戯れを好ましいととらえている詩人（ひいては聴衆）の目を暗示している。

25. オデュッセウスがナウシカに憐みを乞うとき、彼女をアルテミスに譬えるが、

- (1)これは、オデュッセウスの嘆願のための巧みなレトリックである。レトリックはしばしば真実を隠すものであり、これはポリュフェモスを「ウーティス……」で欺いたことに通じる、オデュッセウスの知<sup>メーティス</sup>謀あるいは文化の持つ問題性を浮き彫りにしている。
- (2)これは、レトリックとは無縁の、オデュッセウスの真情、つまり文化の積極的側面を浮き彫りにしている。

26.

- (1)アポロンはオリュンポスの神々の典型としての光輝く永遠の青年神であり、しかも人間に死をもたらす恐ろしい神でもある。この両側面の緊張がアポロンの深い精神性の内容を成している。
- (2)アルテミスは純潔、野生の戯れ、軛からの自由の女神であり、ある意味でアポロンのともいえる知性を感じさせる女神である。

27.

- (1)女神アテネが「近く在る神」であるのに対して、女神アルテミスは「遠くはるかに行く神」である、と言える。
- (2)アポロンと双生の女神アルテミスの知性は、女神アテネのそれが具体的に機能する特質を有しているのに対して、形而上学的・抽象的である、と言える。

28. 資料に、「人間にその限界を知らしめること、ひいては、その限界における自由を指示することこそ、アポロンの「距離」の本質であった」と書かれていたが、

- (1)「その限界」とは、「人間は死すべき者である」ということである。
- (2)「その限界における自由」とは、限界の自覚にこそ人間的自由があるということを意味している。

29. アポロンは人間に死をもたらす神であるとともに、音楽を司る神でもある。それは、

- (1)弓と豎琴はその形態が似ているからである。
- (2)矢が放たれるとき音を発するからである。

30. アルキノオス王は、オデュッセウスについて、彼が生まれたとき運命と糸紡ぎの女神たちが糸で紡いだ分を彼は受けることになろう、と言っている。

- (1)これは、オデュッセウスが人間であるという前提で言われたことである。
- (2)「糸で紡いだ分」とは、オデュッセウスの誕生の際、糸紡ぎの女神たち、特にその代表としての機織りの女神アテネから贈られるべく定められた織物のことである。

31. アルキノオス王は、神々がファイエクス人らにははっきりした姿で現れ、親しく宴を共にする、と述べている。

- (1)このことから、アルキノオスはオデュッセウスが明確な人間の姿をもって現れた神である、と推定していることがわかる。
- (2)アルキノオスは、ここで、神々がキュクロプスたちや<sup>ギガンテス</sup>巨人族とも親しく宴を共にすることを言外に述べている。

32. キュクロプス族とファイエクス族は、同じ自然という根源的秩序の、夜と昼の關係に譬えられるべき二つの現れである、と資料にあった。ここで言われている夜と昼の關係は、

- (1)野生のオリーブと栽培されたオリーブの關係、つまり野蛮、不敬とフィロクセニア、敬神の關係と対応している。
- (2)ファイエクス族が一方でメルヘン的世界と日常的現実、神の世界と人間の世界の橋渡しの存在であるという、それ自体における対比關係とは別次元のものとして言われている。

33.

- (1)聖書宗教においては、神は万物の創造主とされている。つまり神は自然の上位に立つ存在である。
- (2)ギリシアにおいては、オリュンポスの神々から<sup>ギガンテス</sup>巨人族にいたるまで、神的なるものは多様な形で現れるが、これは自然という根源的秩序の多様な現象であった。つまり神々は自然の下位に立つ存在であった。

34.

この資料の著者によれば、

- (1)聖書宗教は、ホメロス及びギリシア悲劇の人間觀・自然觀が<sup>はら</sup>孕む諸問題を解消した。
- (2)聖書宗教の神觀は、ギリシア文化の神觀と比較して、より卓越した精神的所産である。

35.

(1)オデュッセウスは、不死なる神々との対比において、自分は死すべき人間であるとの明確なアイデンティティを持っていた。

(2)オデュッセウスは、「安楽な生を送り給う」神々との対比において、自分は労苦する人間であるとの自覚を表明し、しかもその誰よりも苦難をなめたことに誇りを持っていた。

36.

(1)オデュッセウスは、神々の意志で数奇な禍いを蒙ってきた、と言う。彼はここで神々に対する批判を表明しているのである。

(2)オデュッセウスは「私の財産、召使いや高い屋根を持った大きな屋敷を見たらうえでなら生命を奪われてもよいのです」とべている。これは、自分の留守の間に自分の財産を蕩尽し、妻に言い寄る求婚者たちに、生命をかけて復讐せんとする気持の表明である。

37. この資料の著者は、

(1)オデュッセウスが無秩序と混乱の支配する土地への帰還を願っているのが、ポリュフェモスの洞穴においてではなく、この世の楽園ファイエクス人の国においてであったという点に、納得できない気持を抱いている。

(2)カリュプソの安楽な生、不老不死の寿命の約束を拒否してまでも帰郷を願うオデュッセウスに、死への願望を読みとっている。

38. オデュッセウスの心意気とデルフォイのアポロンの警句に通じるところがあるのは、

(1)両者に不死なる神々との対比において人間存在を見る視点があるからである。

(2)両者に野生の自然との対比において人間存在を見る視点があるからである。

39. 資料[14]に、「獣性と神性という両極端に位置するものは、ギリシアにおいて、根源的自然の現れとして一つにつながってゆき、人間であることはその自然との対比において浮き彫りにされてくるものであった」と書かれている。

(1)獣性ということで、著者は具体的にキュクロプス族のことを考えている。つまりオデュッセウスに代表される人間の内なる自然とは区別される、外なる野生を意味している。

(2)本資料で、キュクロプス族も神的なるものであるとされている。それゆえ、ここで神性と対比されている獣性とは、オデュッセウスに代表される人間の内なる野生を意味している。

40. 資料[14]に、「人間であることは、上下両方向において人間を超えるものの中にあつて、絶えず人間となることに他ならなかった」と書かれている。

(1)「上下両方向において人間を超えるもの」の、「上...」は神性、「下...」は獣性を指している。

(2)「人間であること」と「人間となること」の関係は、獣性と神性との関係に対応している。

41. 前問 40 の前文（引用文）における、

- (1) 「人間であること」は、「人間もまた自然である」という理解を含んでいる。
- (2) 「人間となること」は、人間は単なる自然ではないとの自己理解を示している。

42.

- (1) オデュッセウスが故郷に帰ることをひたすら希求したことは、痩せた土地、悲嘆にくれることもある人間はもちろん、求婚者たちの悪らつな振舞さえもそのままに、人間の現実として肯定するギリシア的ヒューマニズムの表現である。
- (2) 田舎で果樹園を営み、質朴な暮らしをしているラエルテスの姿は、「汝自らを知れ」の精神の具象化と理解してよい。